

# 韓国の日本研究

崔 吉 城 (中部大学)

CHOI Kil-Sung

## はじめに

韓国にとって日本は単なる異邦国ではなく、友邦国であり、かつ敵国にもなる。それは隣国であり、密接な関係にあったことを意味している。それを歴史的にいうならば古代から江戸時代に至るまでは朝日関係は文化的交流から始まった友邦関係にあったが、近代の初めから終戦までは侵略主義による関係から始まった不幸な敵対関係が中心になった。そして韓国人の日本に対する感情は決して良いものとはいえない。人によっては友邦的感情をもっている人もいないわけではないが、敵対感情、あるいはどちらつかずの感情を持っており、歴史上の二つの感情の総合ともいえるアンビバレントな状態である。

韓国において1960年代の政治的ナショナリズムは70年代を経て“文化ナショナリズム”になっていく。経済高度成長を成し遂げたという自信と共に1988年のオリンピックを契機にして韓国のイメージを世界へ宣伝することが出来た。日本に対しても初期の政治的な反日主義から文化的克日主義への変化が起こった。韓国人の日本への関心は“克日”というマスコミの言葉が全国的に流行り、日本研究者も急増して日本研究も学問としてその位置をもつようになった。それは“日本を批判する学問というよりは研究対象にすることを意味する”(韓相一、1993: 6) ことであった。しかしナショナリズムを背景にしている日本へのプライドと、先進国という事実を認めざるを得ないという複雑な感情を保つことは前の時期と変わらない。

大学では日本語学・文学の教員を増員するために日本語・日本文学を専攻する学科がとぎとぎと新設された。日本学科は例外的に啓明大学に唯一存在していた。学科名では日本学科であっても、カリキュラムには日本の社会、宗教、民俗などを設定しており、民俗学科を作るのかという非難もあった。その後2、3箇所大学で日本学科が新設されたが、今だに全国的に日語・日文学科が圧倒的に多い。しかし研究所などの研究機関ではむしろ、日本学研究所、日本文化研究所、韓日問題研究所などという名称が普通であり、学生や社会人の関心を反映するようになっている。つまり大学の学科は学制に従って新設されたのである。従って日本研究への必要性から直接設置されたわけではない。つまり日本文化の研究は大学の学科では特徴を見ることが難しいのである。これが日本語学・文学の教員が増えた主な原因であろう。日本における朝鮮学が朝鮮語と歴史が中心であることは異なって、韓国の日本学が文学中心であることはこのような事情から理解できる。

一方、大学の付設機関として設立された研究所は独立的研究を主導するものが少なく、ほぼシンボリックな存在であり、実際の研究機能を有するものが少ない。しかし注目されるのは高麗大学付設の亜細亜問題研究所の研究成果であり、東国大学付設日本学研究所が文化人類学や民俗学関

係のものを扱っているのも特記すべきである。例えば東国大学付設日本研究所では、金思燁の主導下に日本民俗の共同調査やシンポジウムを通して学際的な研究を行ない、「韓・日古代民俗文化の比較」（金両基、竹田旦、崔吉城）の特集を出している。啓明大学付設日本文化研究所の『日本学誌』に日本の天皇制を特集したものもある。

大雑把に研究所や学会の研究傾向を鳥瞰してみると、古代から近世以前までの朝日関係史に焦点を当てて、朝鮮の民族と文化の優越性の主張を直接あるいは間接的に結びつけているものが多い。なかには日本近世における朝鮮通信使の現代版の韓国通信使的な文化宣伝をしようとする形式的な文化行事があり、国際化時代に相応しく日韓比較研究に関する国際学会も頻繁に行なわれている。しかしこれらも日本自体に関心をもった研究よりは日本への韓国文化の移植を探る志向のものが多い。近代以後終戦までになると、日本を敵対視した植民地時代の独立運動などの研究と、近代化にともなう侵略史に注目しているものが多い。それも日本史の研究ではなく、植民地に対抗する独立運動史が中心になっている。最近の親日文学論的研究も侵略史的脈絡から理解出来る。経済大国の日本に対しては、その長所に驚嘆すべきであるが、侵略者であったというアンビバレントな心理である。

## 1. 日本学と歴史・民俗学

韓国日本学会には歴史・民俗学分科があるが圧倒的に日本語・日文学中心であり、歴史・民俗学分科の研究成果や研究活動は非常に少ない。『日本学報』の32号（1994. 5）の構成を見ると、論文19篇の中9篇が語学、6篇が文学の15篇が語文学であり、その他の4篇の中、教育、歴史、社会が各々1篇と日本人のもの1篇である。これは学会の会員の構成を反映するものである。会員の専攻別では文学が203、語学185、日語日文2、計390人で全会員中85%を占め、その他は教育8、哲学6、西洋文学5、社会学4、経営学4、韓国語学4、民俗学4、日本文化3、歴史3、政治学2、経済学2、言語学2、数学1、思想1、中国語1、韓国文学1、法学1、その他不明である。文学・語学に偏っていることが端的に分かる。この傾向は学制によって作られたものの性格を持ち、学際研究か地域的客観的研究よりは日本国内の研究の延長線の上であるもののような傾向がある。これは独自研究の独創性が弱く紹介が主なものである。大学学科自体が伝統的なディシプリン中心であるので語学文学中心になることは日本学のみではなく一般的仕組みから来るものである。

尹正錫教授は「韓国における日本研究」（国際交流基金、1989）で韓国での日本研究が日韓両国の関係からさまざまな制約を受けており、日本語、日本文学の研究者がもっとも多く、次に政治学、経済学、歴史、考古学などの順になっており、アメリカでの日本研究に比べると史学者が少ないとしている。それは対日感情のためか、あるいは大学で日本史の講義をきちんとすることが少ないためであろうと指摘している。多くの政治学者は日本の国内政治または政策などに関する研究であるというよりは、むしろ韓国側の研究、そして植民地政策研究が多い。そのため地域研究としての日本研究は、未だその地歩を固められずにいる。つまり、氏は韓国での日本研究も「地域研究」として一社会又は特定国家について総合的、かつ学際的にアプローチすべきであることを主張している。

韓国の日本学会（1973年設立）は機関誌『日本学報』20号（1988年）の記念特集「韓国におけ

る日本研究一回顧と展望」によると「韓国における日本語学」は感情的に成熟出来なかったことも事実であり、日韓両国語で完全といえるくらいの駆使能力を備えることが民族の恥の象徴のように思い込んでしまったのである。日本文学研究は国民の反日感情とともに忌避されてきた。日本民俗研究は主にナショナリズムによる研究が多い。日本教育に関する研究も歴史的に不幸な関係から日本研究の忌避現象が出て、研究が不振であった。

「韓国における日本史研究」は1940～1980年代の日本史関係の研究成果を統計的にみると論文の総数が976、単行本が150であり、その中で古代に関するものが151で全体の15.5%を示し、しかも古代の日韓関係に関するものが135で89.4%を占めており、日韓関係系に傾いていることがわかる。一方、近代史に関する研究は396で全体の40.6%であり、特に日帝時代の侵略政策と支配、収奪に関する研究が中心である。日本神話を資料にして韓国神話を復元しようとした崔南善の研究をはじめ、韓国文学、歴史学、民俗学、人類学、日本文学などの分野から神話を題材に研究を行ない、それらは、日韓両国の神話が持つ親縁性を中心に日本文化の源流を韓国に置く文化伝播論的な研究傾向が多く、また、歴史の歪曲の指摘も少なかった。大体それらの研究は国家主義、民俗主義の性向とも非常に密接な関連性を持つものであった。

比較民俗学会が創立されて日韓学者の研究が目立つようになった。そこには日本・中国・韓国の学者たちがそれぞれ自分の民俗について論文を発表したものが主であり、本格的な比較研究には至っていないものが大部分である。また民俗学を歴史科学の一分野と考えている人たちは実証的な研究をするというよりは伝播論的な仮説的なものが多い。しかし比較研究も活発になることが期待される。ただ比較文化的な研究の問題点は自己民族中心主義の強いことである反日か克日は学問として客観性の欠如したものになりがちであろう。日韓関係史や植民地とは関係なく、一つの異国、異文化の研究として戦後、新世代人による本格的な日本研究が望ましい。

韓国の人類学は外国を調査地として研究するという伝統はほぼ皆無に等しい。異国民族学として、人類学を受け入れた韓国の人類学は創立30周年を過ぎた現在においても、異国社会でのフィールド調査資料を基礎にして理論化するところまではいっていない。戦後になって、ほんの少数の学者が西洋で理論を学んで帰国して、韓国内で調査したり、文献研究したりしているにすぎない。その国内学という点では韓国の民族学者から非難されているところでもある。丁度、柳田国男が一国民俗学を提唱した日本民俗学が、国内学としての傾向の強いことを韓国民族学者が無批判的に受け取って、人類学を外へ向けるよう語っているといえる。最近になって、少ないけれども、台湾、日本などで人類学的調査が行なわれていることは耳にしているが、その成果については韓国内で出版発表がなされていないので、その事情は把握しにくい。しかし国内学としての民俗学であると主張した人たちも、旅行自由化によって、むしろ人類学よりも早く海外へ調査に出るようになったのも一現象であろう。彼らは韓国の民俗文化の日本への伝播を探るために日本民俗に関心を持ち、短期間ではあるが、現地調査研究も行なった。「台湾高山族の民俗調査」(任東権)、「日本騎馬民俗征服説と服飾の相関性」(金東旭)、「沖繩のシャーマンについて」(崔吉城)、「在日韓国人の調査研究」(李光奎)、「日本農村での観光事業と〈家〉を中心に」(文玉杓)、「祖先崇拜の韓日の比較」(崔吉城)などがあるが、大部分は本格的な実施調査に基づいてはいない。以上のうち日本に関する研究は李光奎、文玉杓、崔吉城だけである。

文玉杓の『韓国文化人類学』(15、1983)は長期間にわたる本格的な現地調査を通して行なわ

れた、社会人類学的研究として貴重なものである。群馬県片品村花咲で一年半以上滞在して、調査、観察した資料に基づいて分析されている。花咲村は1960年代の初めにこの村の近くにスキー場が開設されたことによって、他の農村や山村とは異なって大きく変化せざるを得なかった。作業の周期が変わり、もとは農閑期であった冬が、最も忙しい観光シーズンになった。また、観光業においては若い世代の意見が重要視されるようになった。しかし、このような状況の中で、民宿、観光業の発展によって新たに变化したものとしては村と部落、畑作からの田作への農業の変化、炭焼きから他の副業への変化、観光産業の「民宿」への発展、世帯、親族と姻族、政治と協力、村祭り（猿祭、祇園祭）などに関して書かれている。氏は日本の村の調査資料、特に英文の論文を多く紹介しながら、徹視的に花咲村での現地調査に基づいて分析を行なった。スキー場は村人の経済的打算を考えさせるような変化も生じたけれども、農家の維持を妨げる要素にはなっていない。それよりはむしろ、民宿業が若い男女に安定した仕事を与えており、経済的発展が社会、宗教的行動を活性化させている。一方、経済的打算による利己心が高まる傾向もあるが、それは伝統社会においても潜在していたと思われる。この論文は現地調査に基づいた分析、理論化が試みられているが、その理論は日本人学者の諸理論と関連づけたうえ、一般化のために再検討をする必要があると思われる。

金宅圭は1979年の2月に日本の東北地方の同族部落で調査をした資料に基づいて韓国の安東地方の河回同姓部落と比較した。「韓日両国のいわゆる〈同族〉部落に関する比較試考」(江守五夫・崔龍基編、1982)を発表した。その内容は主に両国の同族における異質性(特殊性)を中心に比較したものである。

## 2. 主な研究テーマ

### 1) 戦前の朝鮮人の日本研究

韓国での最近の研究は語学にしる文学にしる戦後から出発するように設定するのが一般的であるが、戦前の研究も背景にするか、考えに入れるかすべきである。当時朝鮮人の日本研究というのは、主に朝鮮史と関連のある部分について若干ある。これについて戦後の韓国人によって、親日論的なものとして多少言及されているが、研究として参考にしないのが普通である。親日派への再照明は、ほぼ親日化していく過程か、その行為のみに焦点を当てており、かれの研究業績などについては、余り言及されていない。さらに植民地時代の日本人による朝鮮に関する研究では、日本植民地政策などの日本史の立場を理解するために、韓国日本研究者が研究すべきである。これらは、日本人によって日本語で行なわれた朝鮮研究であり、日韓文化の接触としても研究する価値がある。それについては色々とは是非が分かれている。一つは戦前の日本植民地の脈絡からの調査や研究は、一切使えないという見解からのものである。二つ目は日本時代のものであっても、研究はもちろん調査資料は使う方法によるものであるから、資料化は可能であるという見方である。ある学者は植民地談論によるものであるので当時の朝鮮に対して正しい客観的見方ではないと非難する。

### 2) 文化摩擦的な研究

『日本と韓国の文化摩擦』(辻村明・金圭煥・生田正輝)は日韓マスコミュニケーション・ギャップの研究であるが、日韓比較研究として意味のあるものである。この研究は韓国・韓国人につい

ての日本人のイメージを探る。日本人は韓国に対して悪いイメージを、韓国人に対して優越感もっている。隣人として近くに住むこととか、日本国籍を与えるといったことに、寛容度がかなり低いのである。が、その影響源としては、在日朝鮮人やマスコミの接触や情報によるものがあるという。しかし人は直接的な経験によって否定的な態度から肯定的なものへ変化することが分かった。文化的にも中国文化の経由地としてしか考えていない。個人としての韓国人についてはやや勤勉的とか肯定的な評価もあるが、集団的には韓国人が日本人をそう思うのと共通する。一方韓国人の対日イメージは、多く日本人の対韓イメージに対応しながら差異を見せている。

### 3) 在日朝鮮人の研究

在日朝鮮人に関しては韓国研究として注目されるようであるが、日本人社会を理解するためにも日本の研究としても研究すべきである。李光奎は在日韓国人が外国という特殊な事情のもとで、韓国人としての民族性をどう維持するかということに関して研究し、在日韓国人の形成史として日帝時代の渡日史、社会運動史及び社会変化、地域的分布、職業、出身地、家族構成、家庭生活、教育、差別、日本人の偏見、民族主体性の回復として歴史認識運動などについて述べている。韓国人の人類学者による最初の在日朝鮮人の研究であることとし意義がある。序論、在日韓国人の形成史、社会運動史、分布、社会生活、教育、日本人の差別、偏見、在日韓国人の反応、民族正体性の回復運動、結論。在日朝鮮人の形成の過程で分かることは、韓国からの労働者の受け入れや強制連行により日本人から差別されるようになったことだ。それは韓国人が、世界中の海外の少数民族として優秀な評判を持っていることとは、非常に対照的なものである。そのような日本の事情の下で差別されているので、隠れたり同化したりしていたが、1965年に日韓国交が正常化され、1970年代になってから母国訪問が可能になりはじめ、韓国人としての意識が成立する傾向にあった。80年代には韓国経済が発展したので、韓国の国際的な発言権が高くなり、在日朝鮮人の母国への意識が高まってきた。ただ彼らは母国の南北分断という悲劇的なものが、無条件に統一されることを理想的に望んでいることがわかる。大阪の生野区の韓国人町のような住民は、日本人からあまり好まれない非専門的な仕事を持ちながら、表面的には日本化されているが、食事などは韓国食である。祖先祭祀は民族的正体性を保ち見せるにも良い社会になっている。在日朝鮮人は学校教育で差別されるという。小学生が述べたが、韓国人は可哀相であり恐いといった。もうまく教育されても就職の時に差別されるし、また、最も差別の大きいのは言うまでもなく結婚差別もある。しかし日本人との結婚は圧倒的に多いのが現状である。季教授は最後に在日朝鮮人の差別について日本人側の問題点を指摘する。“在日韓国人は民族的劣等意識と民族的虚無主義から脱皮しなければならない。日本人の持っている偏見と日本社会が持つ差別は、特殊な条件から生じたものであり、決して普遍のものでも正しいものでもない。あらゆる民族には民族なりの長点と欠点があるが、諸民族は互いに長点を中心に民族共に生きる意味を探すべきである。しかし日本人は在日朝鮮人の弱点のみ探し、これを韓国人像にして日本人が自慰することは正しくない。またそれを無批判的に受け入れて、劣等意識と虚無主義に落ちる事も正しくない。中国・満州の延辺地域に居住する在中韓国人、旧ソ連のタシケント地方の在ソ韓国人も、在米韓国人・在ドイツ韓国人・在ブラジル韓国人も、その地域において韓国人が一番勤勉で熱心であって、他の少数民族の規範になっている。ただ日本でのみ劣等視されることは、日本人の偏見が正しくないことを意味するのである”。このような在日朝鮮人の特徴は、1991年9月ソウルで韓国精神文

化研究院の主催で開かれた、「世界中の韓国文化：在外韓人の生活と文化」でより明らかになった。

#### 4) 比較研究

日韓比較文化論的な研究への関心は高い。それが実証的な次元への深化が出来ないものとしても一般的にもさまざま試みているものも多い。縮小志向文化論とか万葉集への解釈などは一般的には知られているが、それが学術的に実証されるまでには至っていない。しかしこれは比較研究への関心が高いことを意味するし、さらにそれを触発するものと思われる。学問的に試みることも、日韓両国において行なわれたことも少ないながらある。最近日韓文化フォーラムによる『日韓比較文化論』などがそれである。日韓の共同・協力研究が盛んに行なわれる傾向がある。

#### 5) 沖縄への関心

筆者は日本留学中1970年代の初め頃、沖縄での現地調査を若干実行して帰国し、沖縄のシャーマンについて発表した。その現地調査をする機会が出来なかった。崔仁鶴の沖縄の昔話の調査などの研究発表があるが、韓国からの民俗調査は難しくなかなか実行されずに現在に至っている状況である。しかし日本留学中の李鎮栄（本島の名護）、崔仁宅（八重山島）での長期間の本格的な現地調査が行なわれており、日本の『民族学研究』などに一部の成果を発表している。韓国でも若干発表している。

しかし韓国人の社会学者や人類学者が関心を持っているものは、沖縄の門中という親族組織である。これは全く同じ文字を使っており同じ親族組織であるので注目するわけである。これについては中根千枝教授が中国・韓国・日本本島との比較をしたので、日韓琉の学者たちが高い関心を持っていることでもある。崔在錫の門中の韓国起源論もある。

6) 天皇制は植民地との関連の強いものであり、なお現在日本を知るうえでも理解すべきである。しかしこれについての研究は殆どない。韓国では天皇を日本的政治システムとして認めていない。天皇と言う言葉を日本王という表現をする。これは王制と天皇制が異なっているにもかかわらず、他の日本語の漢字造語をよく受け入れていながら、この天皇という言葉だけに拒絶反応が強い事は、天皇は植民地支配そして戦争に責任があると見ているからである。啓明大学・日本文化研究所に天皇制についての共同研究がある。

### 3. 研究発展のための課題

語文学中心の研究は、日本での日本学の延長線にあるようなものとして、それが日本の国文学・国史などのナショナリズムのつよいものを受け継いで、逆に韓国ナショナリズムを作るようになる危険性もあると思われる。その意味では比較研究的な研究が望ましいが、それも反日思想によって自己民族主義の強い学問であれば意味がない。このナショナリズムは歴史的なものであると諦めてはいけない。それは現在の日韓関係が巧く行ってないから歴史を借りていることに過ぎない。現在をよく見つめる学問がより積極的に進めば、ナショナリズムを取り外すことが出来ると思う。若手学者の育成は、国内での文献中心学から脱皮して、留学などにより現実社会の脈路から研究することを勧めていくべきである。

東亜細亜における比較がより望ましい。漢字文化圏とか儒教文化圏という共通文化をもっており、それをモデルにして比較研究することが効果的かもしれない。

研究環境を助成するために、学者の交流を活発にすべきである。比較的長期間な体験的な調



査研究が出来るように協力したほうが良いと思う。

[参考文献]

- 「特集：韓国の日本研究どこまで来たか」『日本学報』30、韓国日本学会、1993。  
崔吉城、『日本学入門』、啓明大学出版部、1980。  
崔吉城訳、『朝鮮巫俗の現地研究』、啓明大学出版部、1987。  
崔吉城訳、『韓国の社会と宗教』、亜細亜文化社、1987。  
金宅圭、『韓・日本文化比較論』、文徳社、1993。  
反民族研究所編、『親日派99人』、ドルベゲ、1993。  
尹正錫、『韓国における日本研究』、国際交流基金、1989。  
西岡力、「韓国日本語専攻大学生の日本観」『現代コリア』、1986年11月号  
江守五夫・崔龍基編、『韓国両班同族制の研究』、第一書房、1982。  
李光奎、『在日韓国人』、一潮閣、1983。  
李光奎、「在日韓国人の調査研究1」、『韓国文化人類学』、第一書房、1981。  
我妻洋・米山俊直の『偏見の構図』、日本放送出版会、1967。  
李長燮、「韓国民俗学の批判的検討」、『文化人類学論』、1989。  
韓国日本学会、『日本学報』、20号、1988。  
辻村明・金圭煥・生田正輝、『日本と韓国の文化摩擦』、1982。  
韓国精神文化研究院、『第1回世界韓民族学術会議論文集：世界中の韓国文化』、1992。